

令和4年度 学力向上指導改善プラン

武庫小学校長 松田 文貴

学校教育目標		未来を生き抜く力と健やかな「からだ」の育成 認め合い 学び合い 高め合い	4月		2～3月	
推進主体		管理職と学力向上担当を中心に 学力向上推進委員会を設置	学力向上に向けての重点的な目標		年度末評価	
学力に関する前年度の状況・経年の課題等			(指標となる数値等)		(成果目標達成のための具体的な手立て等)	
					(今年度の成果と来年度に向けた課題等)	
					評価	
学 力 の 状 況	これまでの全国学力・学習状況調査結果の状況(教科に関する質問紙調査の結果も含む)	◆質問紙の「授業でICTを使用しましたか」という問いに対して、以前は否定的な意見が多かったが、意見交換に使用しているという問いについては全国を30%上回っている。タブレットとペーパーの使い分けについて考えていく必要がある。 ◆問題を読み取り、題意を把握したうえで自分の考えを書いたり、その理由を話したりすることに課題がある。	○ICT機器を積極的に活用させ、文房具として使用しながら深い学びへとつなげられるように指導する。	○質問紙の「5年生までに受けた授業で、コンピューターなどのICTをどの程度使用しましたか」という問いに対して、月一回未満と答える児童が0%。 ○児童アンケート調査で、「自分の考えをノートやワークシートに書いていますか」「いろいろな考えを友だちと出していますか」の肯定的な回答を増やす。	○授業で活用が進むように、校内研修会を多く持ち、朝会など教師が積極的にICT機器を活用する。 ○デジタル教科書やアプリケーションを積極的に活用することで、筆記が苦手な児童でも前向きに取り組めるようにし、算数の学習の理解を深める。 ○「まず」「次に」「だから」「そのわけは」「これによって」など筋道を立てた言葉を低学年から丁寧に指導し、リレー説明、なりきり説明、小グループでの交流など、自分の考えを伝える練習ができる場を多く設定する。	
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)	◆テストにおいて、記述での回答を要する設問において無回答の児童が各学年に数名いる。 ●時間が経過すると、学習した単元については、忘れてしまう児童が多い。	○基礎的・基本的な練習問題に繰り返し取り組み、数や計算の知識、技能の定着を図る。	○学期始めの「チェックチェックテスト」で、個々の成長を見取り、週5日毎回10分の「のびのびタイム」に自分で課題を選んで取り組みさせる。	○本校独自の「チェックチェックテスト」を実施し、児童一人ひとりの課題を年度始めに把握し、個に応じた指導に活用する。 ○週5日の「のびのびタイム」を有効に活用し、学年末に三田市算数検定を行い、基礎的な学力の定着を図る。 ○学習内容を定着させるために繰り返し同じ問題に取り組ませる必要がある。ミライシードのドリルパークの有効性を検証していく。	
	授業等からうかがえる状況(各教科)	◆ベアークで、自分の意見を言える児童が増えてきたが、何をどのように話せば効果的であるのか探っていく必要がある。 ◆また、全体の場で自分の考えを積極的に説明する児童は限られている。	○自分の考えを発表やノートづくり、タブレットを使った意見交流で表現することができる児童を育成する。	○問題解決の過程を筋道を立てて、表現することができる。 ○児童アンケートの「いろいろな考えを出していますか」で肯定的な回答を増加させる。	○ノートやホワイトボード、黒板などのツールを活用し、式や図、表などを使った話し合いを授業の中に意図的に組み込み、タブレットとノートの使い分けを行っていく。	
学習 慣 向 上 に 関 連 する 学 習 の 習 慣	学校評価などのアンケート調査やこれまでの全国学力・学習状況調査の質問紙の経年変化による児童・生徒の状況	◆過去5年の学力調査の結果から、家庭での学習や読書習慣に課題がある。	○読書習慣の定着。	○児童アンケートの「家で本を読むのが好きですか」で肯定的な意見を増加させる。 ○学校図書館を活用し、当たり前のように身近に本がある状態を作る。	○家庭読書、朝読書の取り組みの継続。 ○お昼の放送などを利用した、図書委員会の活動の充実。	
校 内 研 究 ・ 研 修 の 状 況	校内研究の状況	◆ICT機器の活用を進めることで子どもが主体的に対話的に、さらに深い学びができるよう、体育科を通して効果的な活用方法を探っていく。	○体育科の中でどのようにタブレットを活用できるか探りながら学校教育全体でICT機器を活用する。	○単元を通して学習計画や授業のめあてを立て、見直しを持ち、それに沿って学習を進めることができるようにする。	○単元計画やめあてを見えるようにし、見直しを子どもたちと共有する。 ○単元や1時間の学習の計画の中に自力解決の時間を位置づける。	
	校内研修の状況	◆児童の生活背景や学力調査の結果をもとに、課題に対して個に応じた指導ができるように職員で共通理解する場を持つ。	○児童の成長や課題、目指す児童像についての共通理解と個に応じた支援の充実を図る。	○児童理解に関わる校内研修会や授業実践の交流会を定期的に開催する。	○定期的に研修会を開催し、児童理解や支援方法、支援体制を検討する。	
家 庭 ・ 校 種 間 連 携	家庭・地域等の状況	◆児童の生活背景を十分に把握したうえで、児童理解に努めるとともに家庭学習や適切な生活習慣などを身に付けられるように保護者との連携を大切にしていける。	○家庭における学習習慣を確立する。	○保護者アンケートの「家庭学習」の項目で肯定的な回答が90%以上となるようにする。	○家庭学習の手引きを配布し、継続的に声掛けをすることで活用させていく。	
	小・中における教科連携等の状況	◆オープンスクールの参観、中学校の教師による出前授業(理科・外国語)が実施されている。また、生活指導担当教員での小中共同研修や特別支援学級の交流会が開催されている。	○小・中の連携を行い、スムーズな校種間の接続を図る。	○年間2回、中学校の教師を招いて出前授業を行う。	○3学期に中学校の授業を体験し、中学校への不安感を減少させる。 ○学校園所連携連絡会を定期的に開催し、学校間の連絡を密にする。	